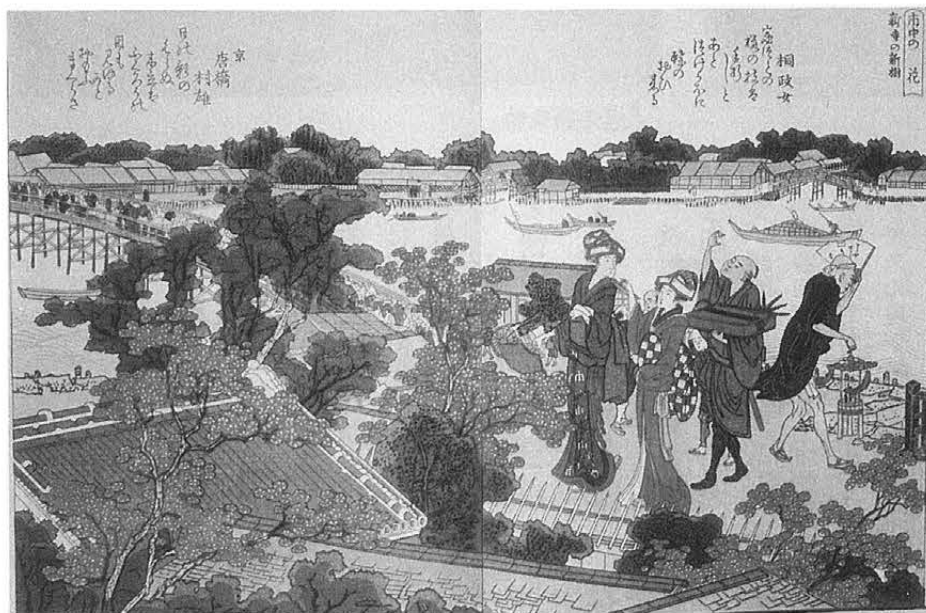


第3回 江東区教育委員会 合同企画展
深川江戸資料館

北斎がながめた隅田川

—江東の歴史と

『絵本隅田川兩岸一覽』—



「市中の花」（『絵本隅田川兩岸一覽』より）

江東区の西端を流れる隅田川は、江戸の文化に大きな影響をもたらしただけでなく、江東区の歴史にも深くかわってきました。今回はこの隅田川をメインテーマとし、葛飾北斎の『絵本隅田川兩岸一覽』をもとに、そこに描かれた兩岸の町々の特色をはじめ、訪れる人々・働く人々などの様相について解説していきます。

今年度で3回目を迎える江東区教育委員会・深川江戸資料館合同企画展が、1月13日より深川江戸資料館で開催されます。21世紀の幕開けを飾るテーマは、江東区の歴史と文化を考える上で切っても切れない縁の隅田川です。葛飾北斎の描く『絵本隅田川兩岸一覽』を軸に兩岸の町、岸辺の景観、名所などをみていきます。時はまさに江戸文化の爛熟期、北斎の描く隅田川と当時の風俗をあわせてお楽しみ下さい。

* * *

■第3回合同企画展

北斎がながめた隅田川

●文化財講習会紹介

文化財保護推進員中級研修会

●公開講演会講演録

—移動できない文化財の
保存と利用—

●工匠壺番館展示替え 装う

●江東歴史紀行

★戊辰内乱期
深川冬木町の一事件簿

●江東今昔(3) ★永代橋東側

●ここにも歴史があった

★リンゴ汁取器

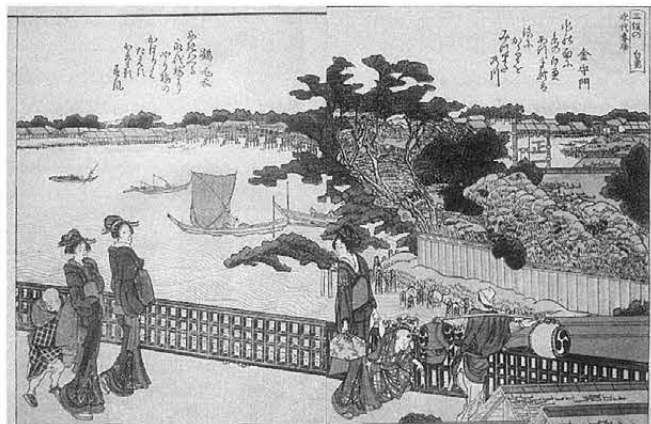
『絵本隅田川兩岸一覽』は文化3年（1806）の刊行といわれ、北斎の狂歌絵本の中でもとくに高い評価を得ています。隅田川を河口から逆上り、西岸（中央区・台東区）から東岸（江東区・墨田区）を眺める形式で描かれています。上流に行くに従って、季節も新春から春、夏、秋、冬と移り変わり、佃島住吉神社への初詣、鉄砲洲稲荷の初午、霊雲院の花見、両国橋の夕涼み、榎寺の盆提灯、待乳山の紅葉、真崎の雪、吉原の終年と隅田川沿岸の四季の景物を折り込んでいきます。さらに、風上げに興じる子供たち、物売りの人物、夕立にあわてる人々などが、北斎ならではの表現力で個性豊かに描かれています。

展示ではこの『絵本隅田川兩岸一覽』を下流から8つの地域にわけて見ていきます。

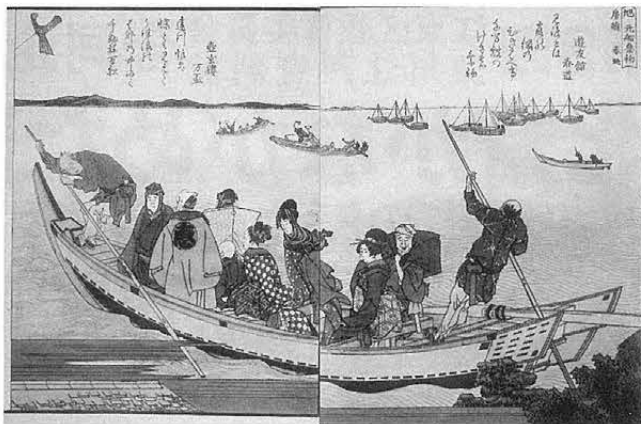
ここで、それぞれのコーナーのポイントをご紹介します。

1 「高輪札の辻・佃の渡」

『絵本隅田川兩岸一覽』の始まりは正月の高輪です。次いで、やはり正月、佃島の住吉神社へ初詣に出かける人々をのせた渡船が描かれています。沖合には帆を降ろした弁財船が停泊しています。この辺りは江戸湊の入口で、



「三侯の白魚」



「旭元船乗物」

日本各地からの物資が集まり、また各地へと運ばれていきました。ここでは江戸の流通について解説します。

2 「佃島・永代橋」

霊岸島あたりから浜町の入堀の河口、俗に三侯と呼ばれる中洲にかけての地域です。対岸に佃島、永代橋の向こうには佐賀町の町が広がります。初午の太鼓売りが描かれているので季節は2月ころでしょう。永代橋の歴史や佃島と深川の獺師町について触れます。

3 「深川霊雲院・新大橋」

浜町河岸・薬研堀に架かる難波橋（元柳橋）あたりから新大橋を望みます。対岸には仙台堀・小名木川の河口や仙台藩蔵屋敷などの武家屋敷が屋根を覗かせています。季節は桜からホトトギスの声が聞こえる新緑の季節へと移ります。新大橋架橋事情、深川の町と無数に走る掘割について見ていきます。

4 「御船蔵・両国橋広小路」

難波橋の北詰から両国橋広小路へと場面は流れていきます。対岸には幕府の船の格納庫、御船蔵が堂々たる威容を誇って連なります。

御船蔵の成立や周辺の町との関連に

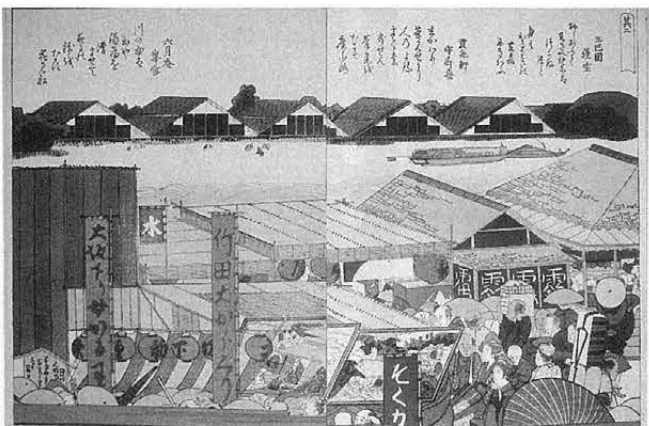
ついて考えます。

5 「両国橋」

江戸随一の賑わいを見せる両国橋。広小路ばかりでなく川面も遊興の屋形船や諸荷物運搬の船、人を乗せて急ぐ船などで賑わいます。両国橋の架橋と広小路の成立を含め、見せ物小屋ののぼりや橋を往来する人々など、広小路の賑わいを紹介します。

6 「新柳橋・首尾の松」

神田川に架かる新柳橋から浅草御米蔵の前あたりを取り上げます。この辺りは、隅田川屈指の釣りの名所でもあ



「御船蔵の舫」

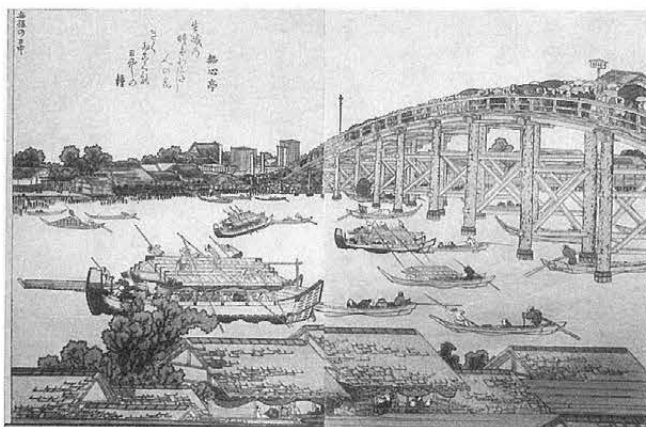
8 「向島・浅草寺」

隅田川もこの辺りまで逆上してくると、江戸郊外の静かな農村の情景が広がります。絵本の中の季節も晩秋から雪景色へと移っていきます。弘福寺・

7 「駒形・吾妻橋」

駒形あたりから吾妻橋の橋詰広場へ至ります。隅田川に架けられた4番目の橋、吾妻橋は本所の発展に大いに活躍した民営の橋でした。吾妻橋架橋の経緯や役割について考えます。

りました。「蔵前」の地名の由来ともなった幕府の米蔵について解説します。



「両国納涼」

長命寺・牛島神社といった向島の名所を紹介していきます。

この他、釣りや名所めぐりなど隅田川を舞台にした人々の楽しみ、隅田川沿岸の年中行事などについてのコーナーもあります。

隅田川の魅力を満載した合同企画展です。是非、ご覧下さい。

* *

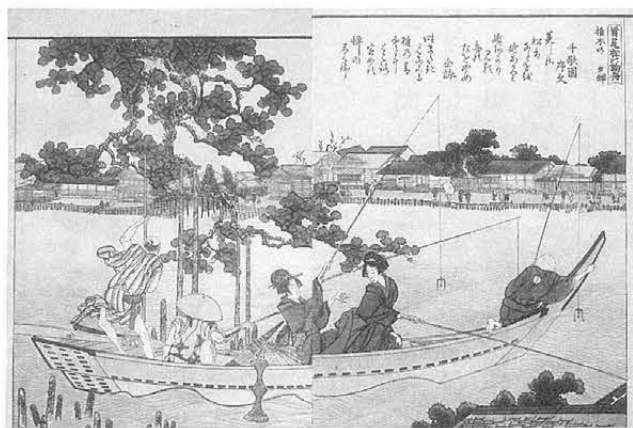
会場 深川江戸資料館レクホール

江東区白河1-3-28

会期 1月13日(土)・21日(日)

時間 午前9時30分～午後5時

入場無料 但し、資料館の常設展示室を見学する場合は、別途入場



「首尾松の鉤舟」

講演会

1月20日(土)
午後2時～4時

会場

深川江戸資料館2階小劇場
「描かれた隅田川―北斎の『絵本隅田川兩岸一覽』に至るまで」

講師

東京都江戸東京博物館教授
小澤 弘先生

定員

240人(先着順) 無料

生涯学習課文化財係

電話 (3647) 9111

内線 3361-3

深川江戸資料館
電話 (3630) 8625



「大川橋の月」

文化財講習会紹介

調べる・読む・考える

文化財保護推進員

中級研修会

文化財係では、文化財の保護・普及のためにさまざまな講習会をおこなっています。古文書解読入門講座(2月)や地区別講習会(6月)の他に、年間をととした講習会として、地域リーダーの養成を目的とした文化財保護推進員講習会(以下「初級講習会」と略)と文化財保護推進員中級研修会があります。初級講習会は、江東区の歴史はもちろん博物館見学や拓本実習など年間23回のコースです。そして、その修了者を対象とするのが中級研修会です。年間10回の中級研修会では、研究テーマを話し合い、グループ研究をおこないます。このテーマを決めるのがなかなか難しいのですが、テーマが決まると、各自が担当部分を図書館などで



成果報告書

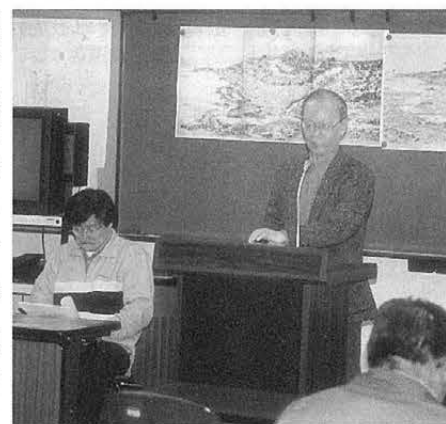
調べて発表し、それを繰り返して1年間の成果報告書にまとめます。今年度(第15期・9人)は、上の写真のように「江戸の江東に自然を探る」という報告書をまとめることができました。

このようにして、自分で調べ、読み、考え、さらにまとめる、という「技術」を身につけるのです。

報告書は、4月以降に区内図書館でご覧いただけますので、ぜひ手にとってみてください。

また、初級講習会修了式のときには、修了生の前で1年間の成果を発表しました。これが次年度の中級研修会につながっていきます。

中級研修会の主眼は、研究のやり方、調べ方を学ぶことにあります。それは誰かの知識にたよるのではなく、自身で新しい地域の歴史像を見つけるための第一歩なのです。



初級修了式での成果発表

文化財保存のあり方

— 移動できない文化財の

保存と利用 —

江東区建造物調査団 堀内仁之先生

この間、久しぶりに旧大石家住宅に行きました。ボランティアの方々にとても大切にしていたいただき、建物が生き生きしていたと思いました。生活のにおいがただよっています。やはり、建物はその中で生活をしなくてはいいのだなと思います。人が、短い時間ですがそこで生活されていることはとても意味があることだと思います。

現在、昭和初期頃までの建物を地方自治体で文化財に指定、保存しようという動きが大きくなっていますが、なかなか生活の器としての住宅・商業建築は保存されにくいのです。そこで、今日は江東区内に限らず、私の身の回りで起きていることを紹介しながら、文化財保存についてどういうことが考えられるかお話ししたいと思います。

写真1は第一勧業銀行浅草支店、旧第一銀行浅草支店の現在の姿です。この2年前の姿が写真2です。この建物

が壊されるというので調査に行きました。この建物は昭和4年築造の非常にいい建物で、内部も素晴らしいものなのですが、これを建てかえる理由は古くなり使い勝手が悪いということです。改造前この建物の3階は全く使われていませんでした。それはなぜか。手入れをしてきれいにしないから嫌なんです。また、現代はコンピュータがなければ仕事にならない。そのためには床を上げてラインを通せばいいのですが、それをするよりも新しくしたいということなのです。

やはり人情ですから清潔でなければ住みたくなくなる。建物を掃除し、美しく使いやすくする。そういうことをしていけばまだ使える建物を壊すようなことにはならないのではないかと思います。

今、建物を取り壊されていく事例をみましたが、ここで建物が取り壊される理由を3つあげたいと思います。

ひとつは、費用の問題です。補修するのと新しく建てるのと同じ費用が必要になってきているのです。このことに関して一番遅れているのは建築設備です。大きい設備だと修理する方法がありません。例えばトイレの排水パイプは全部を外に出さなくてはなりません。建物が壊されていく理由は使い勝手が悪いというよりも、そういう設備更新ができないということにあります。

ふたつめは、文化財としての認識が欠けているということです。寺社建築は文化財として認識をもたれますが、普段使っている建物、商業用や生活をする建物には公共の財産としての認識が薄い。つまり、建物はその中で生活してきた歴史こそが大事であるという認識が欠けているのです。

さいごは、阪神大震災を契機に成立した耐震改修促進法が裏目に出ていることです。耐震改修が義務づけられた



写真1 第一勧業銀行浅草支店(現在)



写真2 第一勧業銀行浅草支店(2年前)

ことで、改修するなら新しく建て直そうということになってしまっているのです。

以上が建物を取り壊される理由として考えられます。ただ、文化財に指定されていけば、税制上では固定資産税免除などの優遇措置や修理時の補助金などがあり、建物を保存しようとする意欲は強い。

それでは次に、保存の方法としてどのようなものがあるのでしょうか。

建物には木造と鉄筋コンクリート造がありますが、比較的木造建築の方が簡単に移築保存でき、修復も建物全部を解体せず悪い材だけ取り替える部分補修ができます。写真3の室生寺の五重の塔もそうして修復されました。こういうことができるので、日本の建物



写真3 平成10年、台風被災直後の室生寺五重塔
 (『月刊文化財』440号より)

はある意味で残りやすかったといえます。木造建築の特徴といえましょう。

木造建築にくらべ鉄筋コンクリート造等の建物は大きく移築することは難しい。これについて有名なのが日銀の本店です。この建物は壊すのが勿体ないということで、背後に新しい建物をつけて保存しています。それから東京海上ビルや京都の中京郵便局などでは古い建物の一部だけを新しい建物にかさぶたのように貼りつける状態で残しています。明治以降の建物を現地で保存しようとするとしても無理がきます。では、どうしたらよいかというと、やはり建物を美しくして、多少ガマンすることがあるかもしれませんが使いながら再利用することが必要ではないかと思います。その典型として資料館・博物館などへの再利用があります。

建物の保存
 といいますが、たんに
 保存という
 より再利用
 の道をとる
 必要がある
 と思います。
 そういう
 意味で冒頭
 にも述べま

したように、ボランティアの方々が旧大石家住宅で小さな菜園を作ったり、薪割りをしたりなど、生活し、使いながら残していることは非常に大切なことだと思えます。是非、そこで餅搗きをしたり、四季の行事を再現したりしていただきたいと思えます。そういう使われ方が本当はいいのだと思えます。

文化財には国、都道府県、市区町村の文化財がありますが、これはそれぞれ役目が違うのです。旧大石家住宅は区の文化財ですが、市区町村の文化財は生活文化財としての意味があります。私達の身近なところで生活し、苦勞してきた人々の歴史を伝えるという役割があるのです。私達の地域に育つ子供達に伝えていく必要があると思えます。

いずれにしても建物を保存していく

にあたり、器だけ残しても仕方がないのです。その中で時間を重ねてきた生活というものが大事なのです。その点、江東区は同潤会アパートなど住居建築が多く残っており、そういう建物も本当は保存していただくことがとても大切ではないかと思っています。

寺社建築のように立派な建物だから残すというだけでなく、建築物は生活の文化財として大切なんだという認識をもつ必要があると思えます。建物はその中でどうやって生活してきたかということが重要だと思えます。

さいごに結論的なことをお話ししながらまとめていきたいと思います。
 文化財の保存の理念として必要な観点は3つあるといえます。

ひとつは義務です。街中の歴史的建造物はもともと維持が難しく、残すためには所有者のみに費用の負担を課さず、社会全体で分け合うことが必要だと思えます。直接的な補修費のみでな

く、多少の不便さも維持のコストとして分担する必要があると思えます。
 ふたつめはきれいにすることです。これは前にも申しましたとおりで、大切なことです。
 さいごは目に見える価値を大切にしようということです。

これらの観点が欠けては保存が行き詰まることとなります。また、保存という言葉は後ろ向き姿勢としてとらえられがちですが、文化財の保存は本当は積極的な新しい環境創設のための行為なのだと思えます。

現在、建物は物質的な寿命よりも経済的な寿命で建て替えられることが多いと思えます。イギリスの人々は建物は古いほどいいものだと考え、伝統や歴史の厚みを体現している建物に自信をもっています。今、産業廃棄物や環境破壊の問題がいわれていますが、まだ丈夫な建物を経済的な理由だけで壊していくことには納得ができません。スクラップ・アンド・ビルドを繰り返しているばかりでは駄目だと思います。

もちろん、形があるものなので減っていくのですが、今はその姿が減っていくのが早すぎるということが問題だと思えます。

*この記録は、昨年10月4日(水)に行われた講演要旨です。



平成12年度 工匠館常設展示替え

装　　う

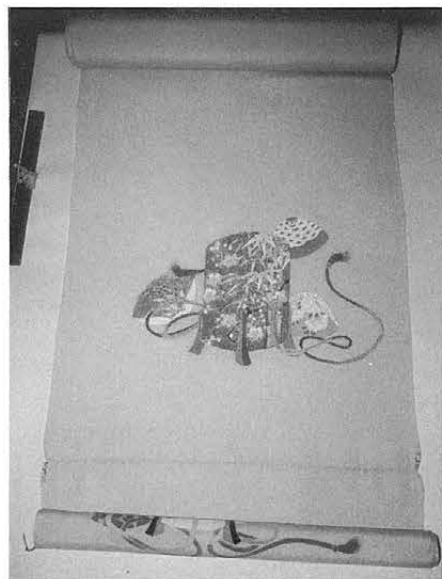
このたび、工匠館番館（森下文化センター2階、江東区森下3-12-17）では、一部展示替えを行います。今回は、「装う」のテーマで、区内で着物やそれに関連する小物関係の仕事をする（していた）職人さんにスポットを当て、手描友禅、紋章上絵（描紋）、半襟、組紐を展示いたします。

長年、人々の生活を彩ってきた伝統的な着物。そこには、時代や地域によって、様々な模様や色彩が施されてきました。今回は、友禅の着物と、家紋（描紋）、さらには半襟の刺繍、組紐もあわせて展示いたします。

それでは、それぞれの技術と職人さんについて、ご紹介いたします。

手描友禅

手描友禅は、染料を着物や帯の生地



手描友禅

紋章上絵

絵章上絵は、生地に紋章を染込み、または染め抜く技術です。上絵筆と紋型を用いた細かい手作業が中心になります。紋章の数は、5000種余

に挿し、さまざまな絵柄（模様）を描く技術です。京都・加賀（金沢）・江戸は産地として有名ですが、細かい図柄を綺麗に描く技法には、日本固有の防染技法が施されています。そのうち、「糸目糊」は、もち米をといった糊を下絵の線の上に引き、「壁」を作り、細かく挿した色が重ならないようにします。

和田宣明氏は、千葉の勝浦に疎開中、義理の叔父で友禅職人の富塚氏に師事し、技術を習得しました。昭和38年頃に東京へ戻り、森下で独立。その後、清澄を経て、45年に亀戸へ移転しました。

半襟の刺繍

刺繍は、色糸で生地に絵画や模様を縫い表す技術です。和服・帯・壁掛などに施されます。刺し方には、芥子繡や相良繡、線を表すまつり繡、駒取りなど、数十種類あります。

石井靖子氏は、神田の共立女子職業学校で学びはじめ、卒業後も両国・横浜で3年間修業を積み、技術を習得しました。戦後、手芸教室を開き、繡和会を組織するなど、普及にも努めました。残念ながら、平成9年3月に亡くなられました。

組　　紐

組紐は、数本の糸を組み合わせ、一本



組紐と紋章上絵(右上)

の紐にする技術です。古くからの技術で、中世には鎧や太刀の緒、江戸時代には武士の刀に付ける下緒などに用いられました。現在では、羽織紐や小物・袋物の紐に用いられます。

田中森蔵氏は、大正7年から日本橋の組紐商「川勝」に奉公して技術を習得しました。昭和10年に日本橋室町で独立し、空襲で一時疎開しましたが、昭和24年に森下に移ってきました。残念ながら、平成8年9月に亡くなられました。

以上が、今回の常設展示替えの作品と技術・職人さんの紹介です。常設展は、毎月第一・三・五曜日を除き、午前9時から午後8時までの間、いつでもご覧いただけます。この機会に、ぜひ一度お出かけください。



戊辰内乱期

深川冬木町の一事件簿

——駿州赤心隊富士亦八郎をめぐる——

明治2年(1869)1月15日、東京深川冬木町(江東区冬木)の才右衛門宅において、駿州赤心隊の富士亦八郎が、旧幕臣の芳賀敬太郎を殺害するという事件が起きました。

赤心隊は、前年1月に始まった戊辰戦争の進展のなかで結成され、新政府軍に従軍して江戸・東京の治安維持にあたった、いわゆる草莽隊の一つです。

富士は、駿河国大宮の一宮富士浅間神社(静岡県富士宮市)大宮司(神職)で、約110人からなる赤心隊の隊長でした。赤心隊の他に東征軍に従って江戸に入った部隊には、遠州報国隊、富士吉田の蒼龍隊などがありました。

さて、先の冬木町の事件を「赤心隊富士亦八郎口書」(静岡県立中央図書館所蔵複写資料)からみてみましょう。この資料によると、芳賀は戦争の際に関東から東北方面へ転戦し、会津落城後は東京(明治元年7月17日、江戸を東京と改める)に潜伏して金策してお

り、そのため冬木町の材木屋へたびたび訪れていました。そして、当時、箱(函)館を占拠していた旧幕臣の榎本武揚軍に合流しようとしたのです。このことが発覚し、事件の直接の原因となりましたが、この事件には、戊辰内乱期における反政府勢力と新政府側との軋轢の一つとしてはかたづけられない背景があります。

実は、富士と芳賀は戊辰戦争が起る前からつながりがあったのです。子細あつて離縁した富士の妹と芳賀が縁組をし、妹の親元になるよう頼まれたのが才右衛門でした。そのため、才右衛門と富士・芳賀は旧知だったのです。

富士と芳賀のつながりはこれだけではなく、慶応3年(1867)初頭当時、富士は下谷御徒町(台東区)の親類宅に止宿しており、家来同様に処遇していた百合元仙之助という人物がいました。この仙之助は、江戸の剣客として有名な斎藤弥九郎の門人で伊

豆蔲山の代官江川氏の家来百合元昇蔵の倅です。故あって仙之助は富士のもとに身を置いていましたが、同年2月19日、仙之助は突然ゆくえをくらしました。その3日後、富士の止宿先に賊が押し入り、金品を強奪しようとしたのです。この賊こそ芳賀だったことが、仙之助の供述により判明しました。仙之助は、芳賀に強盗をそそのかされ怖くなって下総国の父の門人宅へ逃げていたのです。

このような強盗事件があったにもかかわらず、富士と芳賀は沼津藩家来丸山勘太郎の仲介で、今後「不慮之義」が起らないようにと和解しています。以上の経緯は、幕末社会における武士・神職・町人の交流の実態がうかがわれる事例と言えます。

また富士自身、直真影流の岡部因幡守(旗本)の門人となって武芸を学んでおり、息子には代官江川氏のもとで西洋兵術を学ばせました。百合元仙之助が富士のもとに身を置いたのも江川氏との結びつきからでしょう。さらに国元では、訓練場を造って家来や領内の若者を集め、訓練をさせていました。そこに戊辰戦争が起り、赤心隊の結成となったのです。

幕末の社会は、封建制が大きい

く揺らいだ時代でした。そのような時代で、身分制を超えた人々との交流と結びつきを見逃すことはできません。しかもその結びつきには、富士のような武芸、あるいは文芸や学問などさまざまな要因があったと考えられます。

後年、富士がペリー来航などの外圧に対して「甚心痛致し居ました」(『史談会速記録』合本7)と回顧していることなどを考えると、身分制社会に身を置きながらも、幕末の社会変動のなかで政治参加の意識が芽生え、それが富士を戊辰戦争への参加という行為に駆り立てた、と言えるのではないでしょう。神職だった富士が武芸を志したのも、そのような意識の萌芽が背景にあったと思われます。

明治2年1月に深川冬木町で起きた一つの事件は、維新変革という社会状況を投影した事件だったのです。

(文化財専門員 小泉 雅弘)



駿州赤心隊之碑
(富士宮市 富士山本宮浅間大社)

江東今昔(3)

左の写真は「どこでしょう?」というまでもなく、皆さんすぐにおわかりのことと思いますが、昭和30年ごろの永代通りと永代橋です。永代通りとはいえ、40年前は自動車も少なく、通りに面した建物も低く、なにより対岸の中央区側の変貌には目をみはるものがあります。通りの中央には佐賀1丁目の電停があり、都電を待つ人がたまたずんでいます。

永代通りは富岡八幡宮・永代寺へ通じる道として、江戸時代には両側に門前町を形成し、現在と同じ位置にありました。今と違うところは、隅田川へ突き当たった所に永代橋が架けられていないことです。当時の永代橋は、現

在地より約100m上流に架けられていました。元禄11年(1698)に架橋され、その5年前に架けられた新大橋とともに、深川の発展に大きく寄与した橋です。また橋上からの眺望も有名で、江戸湾に浮かぶ廻船の白帆や佃島を望む光景は多くの錦絵の題材となっています。

明治30年(1897)、永代橋が現在地へ架替えられ、永代通りは中央区から本区へ直進しました。明治36年(1903)には茅場町から永代橋を渡って黒江町までの区内初の路面電車が開通するなど、永代通りは、一気に深川のメインストリートとなりました。

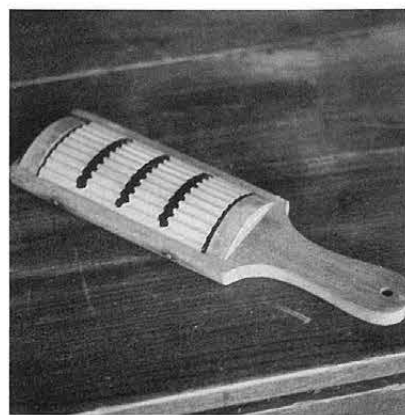
この写真が写されたころ、永代橋の際には、観光遊覧の目的で、隅田公園からお台場・新橋へと隅田川を就航する東京水上バス株式会社の水上バス乗場がありました。

水辺の観光拠点として、昔も今も変わらぬ人気を保つ永代橋です。

昭和30年ごろの永代橋東側(上)と現在(下)

現在の永代橋は、大正15年に完成しました。上流に架かる清洲橋の優美な姿と比べ、どっ

ここにも歴史があった



写真の道具はリンゴ汁取器です。

長さは26・3cm、幅は7・4cmあります。アルミ製の丸くふくらんだおろし板にリングをこすりつけ、削ったものを布巾で絞ると汁が取れます。説明書には、果物の他に、野菜、干鰯、魚のくんせいなどの固いものを

削るのに便利で、とくにたくあんなどを削って歯の丈夫な人と同じ様においしく食べることができるといって文句がみえます。

この様な道具は、すでに昭和七年に蔬菜卸具として実用新案の出願がなされ、おろし板に金属を使い、形を割竹状にする工夫がされました。現在、台所で活躍しているおろし道具の元祖と言えるでしょうか。本品もその流れをくみ、とくにリンゴの汁取器として売り出されたのでしよう。

ご紹介したリンゴ汁取器は、森下1の野口利絵子さんからご寄贈いただきました。

しりとした力強さを感じさせる橋です。その雄姿は変わらないものの、周囲の景観の変化によって心なしか小さく感じられます。

編集後記

子供の頃、「21世紀になったら自分は何をやっているのか?」と考えた人も少なくないはず。また、その時の社会環境と現在とではどれだけ変化したでしょうか。変化ということでは、失

われた自然環境や景観も多いと思います。今回紹介した中級研修会でも多くの発見がありました。より良い地域社会のために、われわれが未来へ伝えるべきものとは……。

さて、第3回合同企画展では、江戸時代後期の隅田川両岸の様子を探ります。葛飾北斎が見た江戸の風景とはどのようなものだったのでしょうか。ぜひ江戸の四季をお楽しみください。